

中国卓球研修 —平成23年度学生海外研修報告—

濱田 美穂

(受領日：2012年4月20日)

高知工科大学 共通教育教室
〒782-8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口185

E-mail : hamada.miho@kochi-tech.ac.jp

要約：平成23年度学生海外研修計画の一つとして、本学と関係の深い瀋陽工業大学、黒龍江大学、ハルビン工業大学への卓球研修の機会を得た。6泊7日という短い期間ではあったが、3大学で練習、試合の時間を与えていただき、中国大学生の卓球のレベルを知ることができ、充実した研修となった。また、試合終了後には、各大学校史館や、瀋陽故宮等での研修も体験し、歴史を大切にする中国の国民性の一端にも触れることができ、意義ある研修となった。

1. はじめに

このたび、本学と交流の深い瀋陽工業大学、黒龍江大学、ハルビン工業大学への卓球研修の機会を得た。1年生主体の卓球部にとって、卓球のメッカである中国の選手との交流はたいへん意義深く、価値のある研修になると確信し、大きな期待を抱いて参加した。

この訪問の目的は、卓球の技術・戦術の習得はもとより、隣国中国の歴史と文化を学ぶこと。多くの友人をつくり、国際感覚・知識・見識の醸成を図ること。また、これまで培われた本学と上記3大学の交流の絆をさらに深めること等であった。

訪問した3大学の選手たちは、いずれも想像していたよりはるかにハイレベルで（技術・体力ともに）、どの選手も筋力トレーニングを相当積み重ねている様子であった。選手たちの体格は非常にたくましく、力強さが感じられた。また、体力トレーニングだけでなく、技術練習にも長時間を費やしていることが推察できた。

中国では各省の卓球隊が一番強く、そこにはえりすぐられた才能の持ち主たちが集結されている。幼少時からプロとして国家から報酬を受け、そこで日々厳しい訓練を積んでいる。チームには当然優秀な省専属コーチが配属され、毎日の練習プログラムが示される。選手たちは合宿所で寝泊まりし、朝・昼・晩と終日練習を行っており皆強い。しかし、大学生はそれらの選手と比べると授業もあり、練習量もかなり少ないのではないかと考えていた。しかし、今

回の研修を通じ、この考えは間違いであったことに気づかされた。

現在中国では省所属の卓球選手がそのチームを辞めることになったとき、高校卒業と同等の資格が与えられ、大学の推薦試験を受験することが可能であるという。黒龍江大学にはその制度で入学した選手が3名いた。先般行われた中国全国大学選手権大会では、その選手たちの活躍で団体戦2位の戦績に輝いていた。チームの中から2名のヨーロッパ遠征中国代表選手が選出されており、黒龍江大学は全国大学ではトップクラスの実力校であった。今夏の研修の際にはその2人の選手（遠征中で不在）との対戦が叶わなかったのは非常に残念であった。

3大学との交流試合の結果は、団体戦においては、男女とも全試合敗北というふがいない結果に終わった（資料添付）。しかし本学学生たちはどの試合も闘争心を全面に出し、精力的に戦った。技術面だけでなく、トレーニングや戦術面等、色々な面で多くのことを学び帰国した。帰国の翌日から練習を再開し、今日に至るまで休むことなく継続している。

帰国後、すでにいくつかの大会に参加したが、この交流の成果は様々な形で現れている。特に、女子においては3地区（中国、四国、九州）学生卓球選手権大会団体の部において、準決勝（熊本学園大学）、決勝戦（別府溝部学園短大）で中国からの留学生を破ることができ、団体戦で初優勝を飾る快挙を成し遂げた。

日常生活や各種の大会で今後この研修の成果が現

れてくるものと確信している。3大学で受けた身に余る歓迎に感謝し、またこのような交流の機会を得ることができるよう、さらに努力を重ねたい。

2. 研修の概要

①研修期間：8月29日～9月4日

(6泊7日)

②研修先：瀋陽工業大学、黒龍江大学、
ハルビン工業大学

③参加者：卓球部、下記16名

男子：システム工学3年	松本 康平
情報 3年	喜島 健太
マネジメント1年	武岡 紀幸
マネジメント1年	和田 直樹
マネジメント1年	古川 佳弘
システム工学1年	吉田 一貴
システム工学1年	森光 祐稀
システム工学1年	谷添 一登

女子：システム工学2年	河渕 絢子
マネジメント1年	松山 明花
マネジメント1年	溝渕 真由
マネジメント1年	原 佳菜絵
マネジメント1年	重本 愛美
マネジメント1年	森木 麻美
マネジメント1年	大和 絵里
環境理工 1年	東 明香里

引率教員：3名

引率職員：1名

本研修に当たり、出発前に事前研修会を2回（8月5日、8月25日）行った。国際交流センター長の八田章光先生、同行する国際交流センター伴美喜子先生、ナノデバイス研究所李朝陽先生、人事部・伊勢幸広氏が参加した。学生には中国の歴史や現状、文化、食べ物、交流大学の特色、中国語等について分担し調査する課題を与えた。また中国語で自己紹介ができるよう、発声練習も積んだ。李先生のご指導のもと、中国語での挨拶も何とかさまになった。交流会で披露する出し物は男子に徳島県出身者が多いため阿波踊りに決めた。女子は中国で「手紙」という日本の曲が好まれているという情報を得、この歌を披露することとした。しかし、7、8月に本学チームは多くの大会（四国大会や全国大会）に参加したため十分な準備はできないまま出発を迎えた。

現地での練習は3大学とも試合に重点を置いたも

ので、団体戦、個人戦を通し色々な戦型の選手と数多く対戦することができた。卓球戦型の育成について中国では伝統であるペンホルダーの選手を育てる動きがあると聞いていたが、3大学ともにペンホルダーの選手は1人も存在しなかった。この傾向は現在の日本の現状と相通じるところがあり、とても興味深い事柄であった。

6日間を通し非常に有意義な研修経験を積むことができたが、欲を言えば1大学に滞在する時間をもう少し長く取ることができたら、さらに高い成果が出たのではないかと考える。今後の課題としたい。

3.1 瀋陽工業大学での研修

最初の訪問校である瀋陽工業大学に出発したのは8月29日(月)の早朝。目的地の瀋陽桃仙国際空港に着いたのは19時半をまわっていた。半日を費やしての長い行程であった。空港には瀋陽工業大学国際交流部長の姜国庆教授と李瀛先生が出迎えに来てくれ、簡単な打ち合わせが行われた。夕食は、学生も含め全員が馬大師レストランで頂いた。初日から沢山ののごちそうが振る舞われ皆よく食べた。



写真1 馬大師レストランにて夕食

中国での学生たちの最初の宿泊は瀋陽工業大学留学生マンションであった。ここでも姜教授がとても気を配ってくださった。

30日からいよいよ研修がスタートした。午前中は瀋陽工業大学図書館と校史館の見学。その後中日学生座談会に出席。続いて卓球の練習が予定されていた。校史館見学では、館内に歴史を大切にする中国ならではの多くの資料が保存・展示されており驚いた。特に大学開学時からの数々の資料を拝見し、本学も早急に展示場を作る必要があるのではないかと考えた。歴史が浅い本学では、今ならまだ開学時からの記録が残っているはずである。外国からの留学生や、来客を迎える時、大学の歴史を見ていただく

のは重要なことではないだろうか。

日本語学科の学生たちとの座談会は、約1時間という短時間ではあったが、両大学の学生たちは初対面とは思えないほどすぐに打ち解けた。筆談を交えながら会話も弾み、友達もできた様子である。入学後まだ日が浅い段階で、このような貴重な体験を得ることができ、幸せな学生たちだと感じた。



写真2 日本語学科の学生と

座談会の後、日本語学科の学生も体育館に移動し、卓球の練習を見学してくれた。瀋陽工業大学の練習はすでに始まっており、その練習内容から、2011年5月、李学長が来学の折に、「うちの学生は弱いですよ」と話されていた内容と違い、皆かなりの強豪であることに気付いた。後に李学長にそのことを話すと、あれから中国に帰り、部員たちを集合させ、今夏はずっと練習を積んでいたということであった。

中国に着いて初めて行った本学学生たちの練習からは緊張の様子が手に取るように感じられた。選手たちは気を張って一球一球、しっかりと打球し、全員が疲れも見せず黙々とボールを追った。調子は悪くはなく、むしろ良いほうであった。瀋陽工業大学の報道部の方たち数人が取材に訪れ、カメラを持って色々な場면을撮影した。中国には幾度か訪問の機会を得ているが、記録を大切に残すという習慣は日本より優れているように感じる。午前の練習は約1時間半で終了した。

昼食は瀋陽工業大学学生食堂の3階の個室で頂いた。大学の食堂らしく、沢山の学生が昼食を取っていた。メニューもかなり豊富のように感じられた。どこに行っても来客用のスペースが設けられており、客人を大切にもてなす中国の国民性が感じられた。

午後からは最初の交流試合が行われた。試合は、予定通り個人戦のゲームで、全部で32試合を戦う方法がとられた。本学の学生たちは1人が2回出場できるプログラムである。全員に可能な限り多くの試



写真3 瀋陽工業大学学生食堂で

合を経験させるため、出発前からお願いしてあったメニューである。コートは全部で8台準備され、体育館両サイドには歓迎の垂れ幕が下りていた。準備にかなりの時間を費やしているのが一目瞭然であった。もし瀋陽工業大学の選手が本学に来訪されることになった場合、このような大掛かりな準備ができるだろうか心配した。また、審判団の服装にも驚かされた。男性はピンクのワイシャツに黒のズボン、女性は同じくピンクのワイシャツに黒のスカートと審判団も正装であった。この催しのために、審判用の服装も新調したと聞く。全員が国際大会さながらの服装を決めていた。審判講習会も何度か行ったという。日本では、全日本選手権を開催するのに審判員召集にはたいへんな労力を必要とする。平日の日中、審判のために協力できる人はそんなに多くはいないし、服装も皆自前で作るため、費用をかけてまで審判として働いてくれる人はなかなかいない。このような大掛かりな歓迎の準備は、本学を大切に考えてくれている瀋陽工業大学でないとできない準備である。

ゲームの開始は、体育館に設けられた入場口から行進してコートに入るといふ、これも国際大会形式であった。主審を先頭に副審判員、対戦者両名と続き、行進曲に合わせてコートに入場する。国際大会を経験したことのない本学学生にとっては、この上とない好体験である。試合前の1分間の練習の後サービスの選択を行うが、その選択方法も、日本とは異なる。ジャンケンでサービスを選択するのは日本だけで、国際大会ではほとんどの場合コインを投げてその表裏の選択でサービス権を獲得するのが主流である。

主審の「開始」の相図でいよいよ試合が始まった。緊張した状況の中で、前半は皆なかなか調子を出ることができなかった。無理もないことである。特に瀋陽の男子選手は筋肉もたくましく、ボールに威力

があった。フォアハンドもバックハンドもサイドにボールが曲がり、なかなか手が出ない状態であった。女子も同様にボールに威力と安定性があった。また、強打できるボールと繋ぐべきボールの見分けがきちんとできており、前半は一方的な敗戦が続いた。このまま負け続けるのかと心配されたくらいである。しかし後半に入り、佐久間学長観戦のあたりから不思議に皆の調子が上がり、後半の5試合は連勝することができた。観覧席にいる瀋陽工業大学の学生たちは終始落ち着いて観戦し、やじを飛ばすこともなく整然と声援を送っていた。マナー教育が行き届いているように感じられた。試合は13時半から3時間を費やして行われ、結果は13勝19敗と負け越しであった(表1参照)。しかし最後に力を発揮できたのは

収穫であった。明日行われる団体戦に向けて今日の試合の反省を生かせるよう指示を与えた。

試合終了後は天下春花園飯店にて李学長主催の夕食会が行われ全員が招待を受けた。「食は広州に在り」という言葉があるが、「食は瀋陽に在り」と言っても決して過言ではないと思われる美味な料理の数々であった。宴は中国恒例の乾杯の繰り返しで、一人ひとりが立って挨拶をし、そのたびに乾杯を繰り返す。この宴の在り方は、40年前に3A大会(アジア・アフリカ・ラテンアメリカ国際大会)に出場した折の宴と少しの変化もなかった。李学長夫人、佐久間学長夫人も出席され、和やかに夕食会は進められた。宴終了前には、本学女子選手が「手紙」という練習してきた歌を披露した。

表1 8月30日 瀋陽工業大学との交流試合(個人戦32試合)

比赛场次安排表

时间 台号	14:00	14:40	15:20	16:00
1	李孚然-喜島健太 3 (〃 - 3) 0	邢志奇-森光祐稀 3 (〃 - 6) 0	邢志奇-松本康平 6 (〃 - 11) 3	李孚然-武岡紀幸 3 (〃 - 5) 0
2	张晓简-東明香里 3 (〃 - 5) 0	鮮 艳-重本愛美 3 (〃 - 5) 1	鮮 艳-松山明花 3 (〃 - 6) 1	张晓简-河渕絢子 3 (〃 - 5) 0
3	诸 峰-谷添一登 3 (〃 - 13) 1	刘双伟-吉田一貴 3 (〃 - 3) 0	刘双伟-武岡紀幸 3 (〃 - 9) 0	诸 峰-和田直樹 3 (〃 - 10) 2
4	张 伟-重本愛美 0 (6 - 〃) 3	徐汉雄-東明香里 0 (3 - 〃) 3	徐汉雄-溝渕真由 0 (1 - 〃) 3	赵 娜-松山明花 0 (9 - 〃) 3
5	赵渤际-吉田一貴 1 (〃 - 3) 3	孙 睿-谷添一登 3 (〃 - 5) 0	孙 睿-和田直樹 3 (〃 - 9) 0	赵渤际-松本康平 0 (9 - 〃) 3
6	赵 娜-森本麻実 3 (〃 - 〃) 1	刘祖辰-大和江里 3 (〃 - 7) 0	刘祖辰-河渕絢子 3 (〃 - 9) 0	张 伟-溝渕真由 0 (6 - 〃) 3
7	周洪盛-森光祐稀 3 (〃 - 10) 1	孙洪飞-喜島健太 3 (〃 - 〃) 1	孙洪飞-古川佳弘 3 (〃 - 6) 0	周洪盛-古川佳弘 0 (3 - 〃) 3
8	马 帅-大和江里 1 (〃 - 〃) 3	张 伟-森本麻実 1 (〃 - 〃) 3	张 伟-原佳奈絵 0 (3 - 〃) 3	马 帅-原佳奈絵 0 (3 - 〃) 3

瀋陽滞在3日目（8月31日）。この日は瀋陽でのメイン行事である団体戦が行われた。早朝7時にホテルを出発し、体育館に着くとすぐに練習を始めることができた。8時前になると館内は徐々に騒然とし始め、ほどなく300人ほどの大学生が観戦のために入場した。体育館は一気に大会らしい華やいだ雰囲気包まれ、昨日に続き学生たちの緊張は高まった。開会式では、まず李学長より本学との交流の歴史についての説明がなされ、続いて歓迎の挨拶を受けた。交流の深さが汲みとれる感激する内容であった。



写真4 瀋陽工業大学にて団体戦の開会式

開会式に続いて行われた団体戦のオーダーは下記のとおりである。

- 1 番：女子シングルス 溝渕
- 2 番：男子ダブルス 武岡・和田組
- 3 番：女子シングルス 松山
- 4 番：混合ダブルス 武岡・松山組
- 5 番：男子シングルス 武岡
- 6 番：女子ダブルス 溝渕・原組
- 7 番：男子シングルス 松本

この試合では、学生たちは大会の雰囲気にも少し慣れ、幾分かリラックスしていたように見えた。前日の戦い振りを考えると、調子もかなり上向き、内容の濃い試合ができた。一方的に押されていた昨日と違い、ラリー戦では対等に戦える場面も随所にみられた。表2は団体戦の結果である。

結果は3対4で敗れるという惜しい負け方であった。もう少し頑張れたのではなかったかと少し悔しい思いがした。試合では、「あの時もう少し頑張ればよかった」と後で反省することがよくある。しかし後で反省するのは簡単なことで、勝負とはその時にどれだけ自分の力を発揮できるかが重要である。そのことを、学生たちが心底感じてくれたら、今回の研修には意義があったと言えるだろう。

表2 瀋陽工業大学との団体戦結果

	高知工科	3	対	4	沈阳工业
順番	溝渕	2	11-7 6-11 5-11 14-12 3-11	3	张晓简
2 番	武岡 和田	3	11-4 12-10 11-9	0	周洪盛 刑志奇
3 番	松山	1	5-11 13-11 3-11 9-11	3	鲜艳
4 番	武岡 松山	0	10-12 4-11 2-11	3	李孚然 刘祖辰
5 番	武岡	1	13-15 12-10 8-11 5-11	3	孙洪飞
6 番	原 溝渕	3	11-3 11-8 11-7	0	张晓简 赵娜
7 番	松本	3	11-8 14-12 11-3	0	赵渤际

それにしても、瀋陽の学生たちは皆サービスがうまかった。これは昔からの中国の卓球の流れを汲んでいるものだろう。大いに見習わねばならないところである。

試合終了後の午後からは李学長の計らいで、故周恩来主席の母校（小学校）の見学が予定されていた。これは、日中国交回復（ピンポン外交と呼ばれた）に尽力した故周恩来主席と卓球の関係を考慮しての計画であった。しかしこの見学は試合が予想以上に長引いたこともあり中止となった。残念であった。夜は佐久間学長主催の夕食会が開催された。夕食会には瀋陽薬科大学・東北大学の先生方も出席され、



写真5 大会終了後瀋陽工業大学学生と

親しみ深いお人柄で宴席を盛り上げた。李学長のおおらかな人柄、明るい笑顔が印象的であった。

3.2 黒龍江・ハルピン工業大学での研修

9月1日（木曜日）から3日（土曜日）までは黒龍江大学、ハルピン工業大学での研修が実施された。1日はホテルを8時10分に出発し空港に向かった。中国でもやはりこの時間帯のラッシュはすさまじく、車は今にも衝突しそうな勢いで急停車や急発進を繰り返しながら、けたたましいクラクションを鳴らし、やっと空港にたどり着いた。この地で車を運転するのは至難の業である。1972年当時、国民が紺や黒の人民服をまとい、自転車で沢山の荷物を両ハンドルにぶら下げて通勤していた情景は今ではどこにも見当たらなかった。今の中国の若者たちにはその時代の様子はきつと想像もつかないだろう。当時の人たちは皆、だれに尋ねても「今の夢はお金をためて自転車を買うことです」と語っていた。それにしても昔、道路にあふれんばかりに走っていたあの沢山の自転車は一体どこに行ってしまったのだろうか。不思議な気さえた。今回の研修旅行では、町中で自転車を見かけることはほとんどなかったからである。

空港はウィークデーだというのに沢山の人で賑わっていた。中国の現在の豊かさが象徴されていた。発展状況は5年前の訪問時と比較しても各段の差があった。空港では李先生の指示に従いハルピンまでの移動の準備が進められた。いよいよ瀋陽ともお別れである。見送りの姜先生と別れを惜しむ学生たちの姿から、瀋陽研修の数々の場面が思い出され、惜別の念が湧き起った。

ハルピン着は予定通り11時45分。宿泊は黒龍江大学留学生会館。とてもきれいな宿舎であった。この大学敷地内にある多くの学生寮で黒龍江大学の学生たちは全員寮生活をしているのである。日本の大学

では、全員が寮生活をするというのは考えられないことであり、驚かされた。



写真6 瀋陽桃仙空港にてお別れの記念写真

昼食後、市内観光が予定されていた。ハルピンの町も40年前の訪問時とはすべてが雲泥の差であった。人びとの服装はとてもカラフルで、ちょうど休暇中らしく町は大勢の観光客で賑わっていた。特に聖ソフィア大聖堂はロシア正教会の聖堂でハルピンを象徴するロシア建築で有名である。現在は教会・聖堂としては使用されておらず、ハルピン建築芸術館として一般公開されている。建物の前では、カメラやビデオを持った親子連れや恋人らしき人たちが楽しそうに歓談し、アイスクリームや焼き鳥のようなものを食べながら見物を楽しんでいた。ここでも中国の人たちはとても豊かな感じに見受けられた。

観光を17時に終わると、18時半からは歓迎夕食会が催された。この夕食会も含め、ハルピンでは李先生のご主人（王君林氏）がすべてのお世話を引き受けてくださった。王氏は、黒龍江大学の事務全体の責任者で黒龍江大学70周年記念式典の重責を担っておられた。連日、夜中まで激務をこなされていたにもかかわらず、私たちのために奔走してくださった。

歓迎会には党委副書記の曲科軍先生が出席され、大学の仕組み等、色々な話を伺うことができた。卓球に精通されている方で、昔の中国の選手もよく知っておられた。中国の卓球愛好者の多さには幾度訪中しても驚くばかりである。歓迎会終了後、強豪だと聞いている、黒龍江大学との交流試合に向け、気を引き締めるよう選手たちを激励し、宿舎に戻った。明日2日は午前、午後共に合同練習。夜には記念式典の最初の行事として卓球大会が開催される予定である。

9月2日（金曜日）。早朝6時過ぎ、学生たちとトレーニングを行うため、少し早めに宿舎から外に出た。するとどこからか号令のようなかけ声が聞こえてきた。その声に引き寄せられるように歩いて行



写真7 聖ソフィア大聖堂前にて

くと、いつの間にか学生寮の隣にある広いグラウンドまで来ていた。グラウンドでは、迷彩色の戦闘服のような服装をした学生たちが整列や行進の練習を繰り返していた。かなり厳しい訓練の様子である。見入っていると目の前で1人の女子学生が、貧血状態になりフェンスに寄りかかったのに気付いた。教官が駆け寄り、彼女の具合を尋ねている様子である。咳も出ているように見えた。そのうちそこに座り込み、足を投げ出し見学し始めた。少し教官に反抗しているようにも見えた。しかし、これは思い過ごしだったのかもしれない。

訓練内容は、行進だけではなく、大きな声を出しながら、少林寺拳法のような動きをしている場面もあった。あとで通訳の方に聞くと、中国では大学に入学した新生はこの訓練を全員が受けなければならないという。厳しさには定評のある人民軍が大学教育に協力する形で毎年行われている入学行事の1つだと知った。結局この訓練は私たちがハルビン滞在中、朝から晩までずっと続けられていた。昔、この町の小学校で見学した、武器の模型を持つての射撃訓練とは少し様子が違っていたが、かなり厳しい内容には変わりがなかった。この訓練から集団行動や生活の規律を学び大学生活に入るのだという。彼らの真剣な態度には圧倒されるものがあった。日本の大学生はこのような厳しい訓練に耐えることができるだろうかとふと考えたりもした。

トレーニング、朝食を終え、この日は8時半からの午前の練習に参加した。少しでも強い選手たちと1分でも多く練習をさせてほしいというのが出発前からの希望であった。その希望を聞き入れてくれたうえ、さらに黒龍江省の卓球コーチである王永剛氏をわざわざ迎えてくれていた。この方は以前日本の「健勝苑」というプロチームで活躍されていた有名選手である。午前中約40分間の練習を3コマ行ってくれた。全国大学卓球選手権大会団体で準優勝の成

績を挙げている選手たちは予想通り強豪であった。ヨーロッパ遠征に中国代表として遠征している2名の選手は不在であったが、男子も女子もガッチリとした筋肉隆々の体形をしており、筋力トレーニングを積んでいるのが理解できた。女子のボールにも男性並みの威力があった。このような選手たちと毎日練習ができたならさぞ強くなるだろうと感じた。練習の中で王コーチから何人かの選手が指導を受けた。指導の内容は、選手の打球時の足の構えについての注意がほとんどであった。最近、日本の選手はフォアハンドの打球時に足を平行にしたまま打球する選手が多い。そのことをやはり的確に指摘された。そもそも中国の卓球は初期のころには日本が指導を行ったことから始まっている。当初日本が指導した、右足をやや後ろに引いて腰を使ってフォアハンドを打つという基本が、中国では今でもしっかりと継承され根付いている。反面、肝心の日本では、最近すっかりその基本がないがしろにされている。世界の卓球界で、なかなか勝てないのも、そのことに起因しているのではないだろうか。

黒龍江大学は、本来なら午前中2コマの練習であるのだが、滅多にない機会だったので無理を言って3コマの練習をお願いした。皆、疲れを吹き飛ばすかのような頑張りで練習に取り組んだ。また、強行だとは思ったが、昼食後も(13時～16時まで)再び練習時間を取っていただいた。学生たちの様子から、少し疲れているのが汲み取れたが、この貴重なチャンスを生かすため、少し無理をしてスケジュールを組んだ。しかし心配が的中し、体調の悪い選手が出始めた。「今しかない」と少し無理をさせてしまった結果、腹痛の選手が3人も出てしまった。午後の練習を欠席することになり、とても残念であった。指導者として反省しなければならない。

夜行われた交流試合には、70周年記念行事の最初の催しであることもあり、一般の大学生たちが沢山見学に来てくれた。会場はたいへんな盛り上がりよ



写真8 黒龍江大学とのダブルス戦

うで、とても華やかな雰囲気であった。試合は案の定、力にかなりの差がみられた。ボールの威力に押され、ラリーは終始先手を取られた。

黒龍江大学の選手たちは、我々に対し、手を抜いても楽勝できる力であった。しかし、選手はだれ1人として手を抜かず、得点を1本も取らせまいという気迫で終始集中して戦ってくれた。やはり中国の全国大会で決勝戦まで進出しているチームであり、気迫が違っていた。李大志コーチにそのことをお尋ねしたところ、日ごろの練習からそのことは強く心掛けていているという答えが返ってきた。同感であった。最後まで気を抜かず必死に戦ってくれたことをたいへんありがたいと感じた。



写真9 黒龍江大学との団体戦

自分より弱い相手と戦う時、手を抜かずにやりきることは簡単そうでなかなかできないことである。弱い選手ほど、自分より下の選手には手を抜いて戦うことが多々見られるからだ。黒龍江大学のコーチや選手に敬意を払いたい。

本学の選手たちもそのことを感じ取ってくれたようで、これは大きな収穫であった。大会終了後、皆すぐに打ち解け記念写真を撮ったり、電話番号を交換したりと別れを惜しんでいた。短い出会いである

のに若いということは素晴らしく、すぐに打ち解け友情を深める。この出会いが帰国後の学生たちに何らかのプラスになれば嬉しいと思い、その情景を見守ったことである。

表3は黒龍江大学との試合結果である。

最終日（9月3日）、この日の予定は午前中ハルピン工業大学との交流試合が行われる予定であった。開始式に当たり、副学長の周先生がご多忙の中わざわざ挨拶に出向いて下さった。

周先生は中国の著名な院士の称号を持たれ、東大時代、佐久間学長の研究室に在籍しておられた。卓球のことにも大変詳しく、「日中戦の映画を観たこともある」とのお話であった。挨拶を終えると秘書の方が待ち構えていて、すぐに席を外された。ご多忙ぶりが伺われ、わざわざ挨拶に来てくださり申し訳ない気がした。

開会式が終わるといよいよ交流試合が始まった。ここでの試合は団体チームを男女とも2チームずつに分け、ハルピン工業大学の4つのチームと対戦する試合方式であった。男子一群として武岡、古川、和田選手、二群として谷添、吉田、喜島選手が出場した。また、女子一群として河淵、溝淵、松山、原選手、二群として重本、大和、東、森木選手が出場した。国立の重点大学であるにもかかわらず、選手はかなり強く、男子はいずれも0対3で敗れた。女子も接戦をしたもののどちらも（一群2対3、二群1対3）惜敗してしまった。表4、5、6、7参照。昼食は学内の食堂で頂くことになり、ここでも選手たちは交互に席に着き、交流を深めた。筆談で話をしたりユニフォームを交換したりと、驚くほどよく打ち解け、通訳の方に「若者には通訳はいりませんね」と言わせたくらいであった。

表3 黒龍江大学との団体戦の結果

9月2日

男子

- 1 武岡 0 (2-11, 8-11, 3-11) 3 介振露
- 2 古川 0 (5-8, 5-11, 5-11) 3 高成
- 3 武岡 1 (12-10, 13-11, 3-11) 3 薛建民, 長濱
- 4 和田 0 (6-8, 3-11, 3-11) 3 介振露
- 5 吉田 0 (4-8, 4-11, 3-11) 3 高成

女子

1. 重本 0 (3-8, 2-11, 3-11) 3 邱阳
2. 松山 0 (6-8, 7-11, 3-11) 3 吴静
3. 河淵 1 (7-9, 7-11, 3-11) 3 李佳德
4. 松山 0 (6-8, 7-11, 4-11) 3 邱阳
5. 河淵 0 (6-8, 3-11, 3-11) 3 吴静

表4 男子一群団体戦結果

男子	高知工科	0	対	3	哈尔滨 工业
1 番	武岡	0	11-13 14-16 5-11	3	高源
2 番	古川	0	7-11 4-11 9-11	3	陈绍卓
3 番	武岡 和田	0	9-11 7-11 4-11	3	陈佳宁 管伟奇

表5 男子二群団体戦結果

男子	高知工科	0	対	3	哈尔滨 工业
1 番	谷添	0	1-11 7-11 3-11	3	张绍平
2 番	吉田	0	2-11 5-11 8-11	3	闫石
3 番	喜島 谷添	2	12-10 11-8 7-11 7-11 5-11	3	孙一鹏 贾皓天

午後からは、ハルビン工業大学の博物館を見学した。この大学は、1920年に創設され、その後1954年に国内6校の重点大学となり、以来一貫して国の重点育成対象大学となっているのだと聞いた。また1999年には世界の一流大学を目指す9大学の1つに指定され、特に宇宙工学では優れた成果を残しているという。館内には宇宙服やロケットが数多く展示されており、宇宙工学部門での活躍が手に取るようであった。また、これまで同大学に功績のあった人物の額縁が沢山展示されており、瀋陽工業大学同様、昔の人を大切にする中国の慣習が再認識された。見学を終え黒龍江大学に戻ったのは、3時半を過ぎていた。

夜は、黒龍江大学の学生組織が歓送迎会を開いてくれる予定になっており、皆はその準備と明日帰国の準備に取りかかった。歓送迎会は私たちを送る会

表6 女子一群団体戦結果

女子	高知工科	2	対	3	哈尔滨 工业
1 番	溝渕	3	11-8 4-11 11-9 12-10	1	王辰
2 番	松山	2	11-7 4-11 2-11 11-8 8-11	3	张月
3 番	原 溝渕	1	5-11 12-10 7-11 8-11	3	徐琳 徐 晟
4 番	原	3	8-11 5-11 11-7 11-9 11-8	2	徐晟
5 番	河渕	1	8-11 11-6 8-11 7-11	3	徐琳

表7 女子二群団体戦結果

女子	高知工科	1	対	3	哈尔滨 工业
1 番	重本	2	14-16 11-7 11-9 4-11 6-11	3	马敏
2 番	大和	1	4-11 6-11 11-6 4-11	3	欧阳青 意
3 番	重本 東	3	12-10 11-6 12-10	0	郭荔 温馨
4 番	東	0	8-11 3-11 6-11	3	马敏

と、これから入学してくる各国の留学生を迎える催しで、すべて学生会の学生が企画、実行する会であった。17時開演で21時まで交流を深めるというもので、学生主導の司会や余興はプロ顔負けの見事なものであった。

ここで本学の男子は阿波踊りを披露し、女子は「手紙」を歌った。学生たちは時間の過ぎるのも忘れて楽しそうに振る舞い、この研修会の最後のひと時を満喫していた。黒龍江大学は語学に強い大学であるだけに、さすがに学生たちの中には日本語に堪能な学生もいて、流暢な日本語で会話を楽しんでいた。夜の更けるのも忘れるようであった。

9月4日（日曜日） 帰国。早朝、午前5時40分には宿舎を出発し、帰国の途に就いた。李先生とご主人の見送りを受け、バスの中での朝食まで準備していただき、黒龍江大学を後にした。日曜日の早朝であるにもかかわらず道路はやはりかなり混雑しており、予定より少し遅れて空港に到着した。伴先生の指示で、手続きも難なく済ませることができ、高知空港に着いたのは午後8時半過ぎであった。大きな問題もなく皆が無事に帰国でき本当に良かったと安堵した。

4. 終りに

今回の研修旅行を終え、学生たちが卓球技術の面だけでなく、色々な面で成長することができ、実り

多い研修であったと考えている。中国の歴史や現在の発展ぶりを目の当たりにし、学ぶことも多岐にわたった。これらの国際交流の経験を、今後の学生生活に生かし、ますます頑張ってもらいたいと期待している。

帰国の翌日から練習を再開するという厳しい計画にも、皆が元気で参加してくれた。「継続は力なり」という言葉を実践できるよう、これからも学生ともどもがんばっていきたい。

この研修旅行の実施にあたり、中国の多くの関係の方々、学長、王先生、李先生、伴先生、伊勢さんにはたいへんお世話になった。感謝の気持ちでいっぱいである。



写真10 工科大交換フラッグにサインを書く

Reports on Student Study Tours to China in 2011

Miho Hamada

(Received: April 20th, 2012)

CORE Studies, Kochi University of Technology
185 Miyanokuchi, Tosayamada, Kami, Kochi 782-8502

E-mail : hamada.miho@kochi-tech.ac.jp

Abstract: I had the opportunity to participate in some table tennis training as a part of the overseas program for students in 2011 at Shenyang University of Technology, Heilongjiang University and Harbin Institute of Technology in China, all of which have a close relationship with our institution. The seven-days trip felt short yet fulfilling. I enjoyed practice matches with students there, where I learned the current level of university students in the country. After the matches, I was introduced to some cultural aspects of the country by visiting each university's history museum as well as the historical spot of Shenyang-Gu visiting. I felt that the Chinese people truly respect their own history.